昭和61年2月1日

郷土あれこれ

郷土館だより
第13号

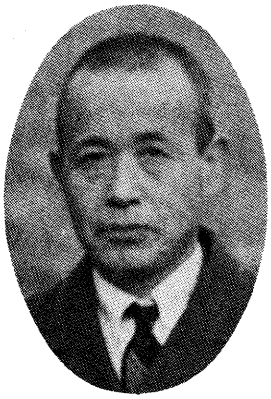
五日市町立
発行　五日市町郷土館　東京都西多摩郡五日市町五日市920-1　電話0425・96・4069　有線4607

カメラが見た 子供の四季

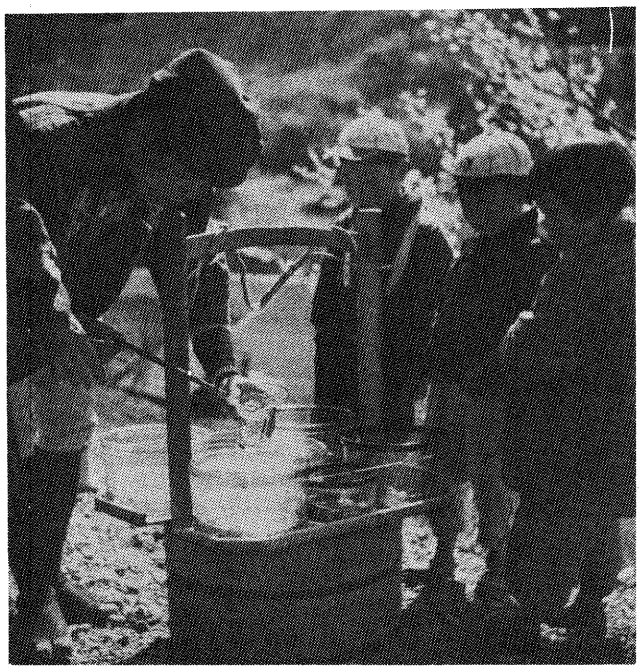
―終戦直後の五日市の子供たち―

はじめに

五日市町小中野在住の故坂本洋次郎氏（昭和47年没）は、読売新聞記者であり、当地方のニュース探訪のかたわら、たえずカメラを携え、郷土の社会、自然の諸相を写して廻られた。氏の没後郷土館に寄贈された写真ネガ数百点は主に昭和20年代のもので、坂本氏の壮年期の作品である。当時は敗戦の衝撃から立ち直りはじめたものの、経済生活は至って貧困な時代であった。しかしカメラがとらえた世相はのびやかで、心温まる状況が多い。これは坂本氏のお人柄にもよると思われる。氏のカメラ・アイは新聞記者の目と芸術家の目の複眼になっているようだ。坂本氏のご兄弟には画家が多いが、氏も多分に絵心をお持ちあわせとみえる。今回は写真の中から子供たちの生態を写したものを選び出し、**紙上写真展**を試みた。



故坂本洋次郎氏

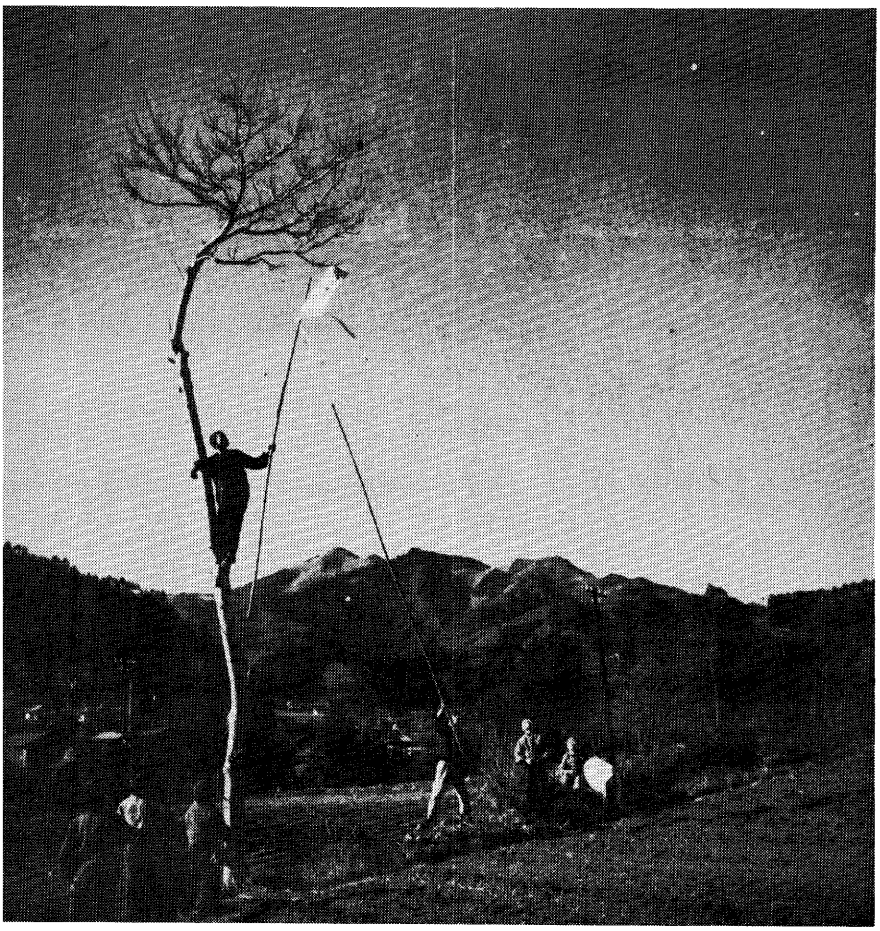


金　魚　売　り　桃が咲く頃やってくる

こどもの世界

テレビの無い時代の子供たちは、戸外に遊びを求め、群れをなして山野を横行した。幸いに五日市には子供向きの自然がタップリあった。夏、子供たちは終日川遊びにふけったが、冬、その川は凍ってスケート場になった。川の水はまだまだ奇麗で豊富だった。男の子は高い岩から淵をめがけて飛び込んだが、ちっちゃな女児まで負けずに飛んだものだ。

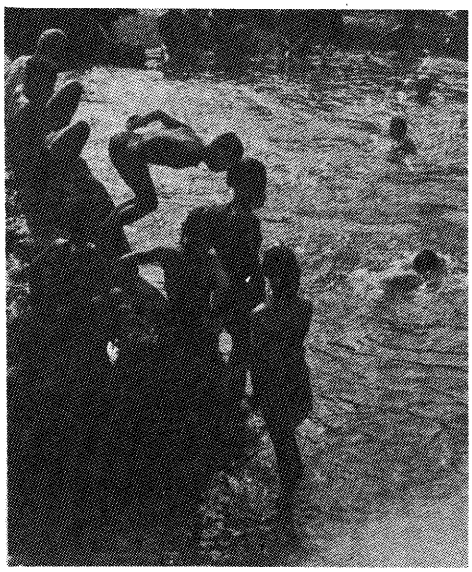
野外の子供集団は地区集団で、川でいえば、宮淵―小中野、小能淵―上町、第六天―仲町、ヤソ淵―下町の子供たちがたむろした。地区の上級生は遊びのリーダーで、下級生の庇護者でもあった。子供特有の「いじめ」がないわけではないが、親も教師も放っておいた。岩角ですりむいた傷と同様、ひとりでになおると知っていた。今、子供の世界から天然自然と、野外集団が失われた分だけ、学校の比重が大きくなった。子供たちも息苦しく、またガキ大将の役割まで押しつけられた先生方もやり切れない。

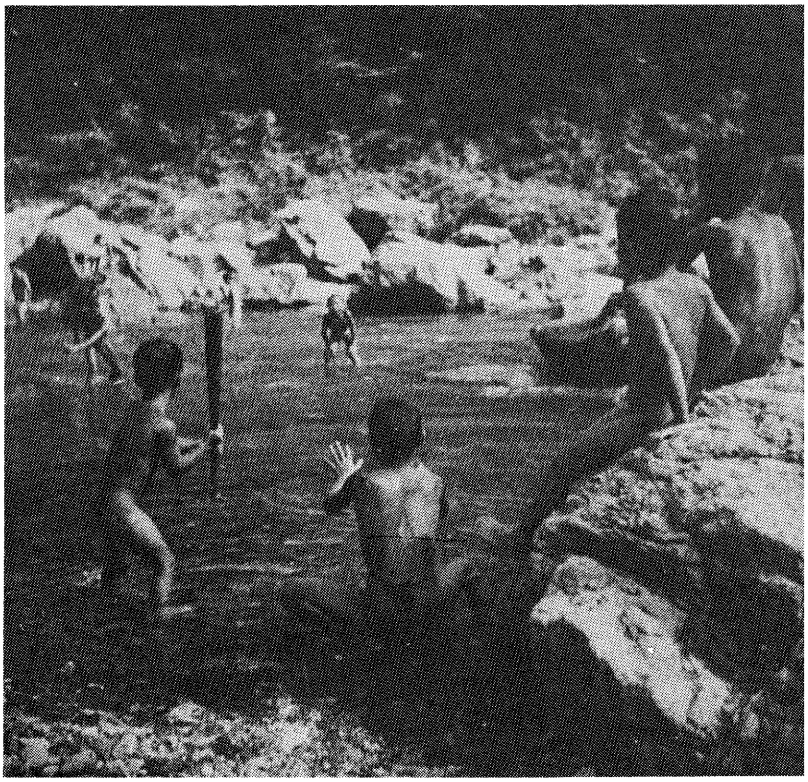


▲ **凧上げ** こどもは風の子

▼ **スケート**（十里木 石舟）

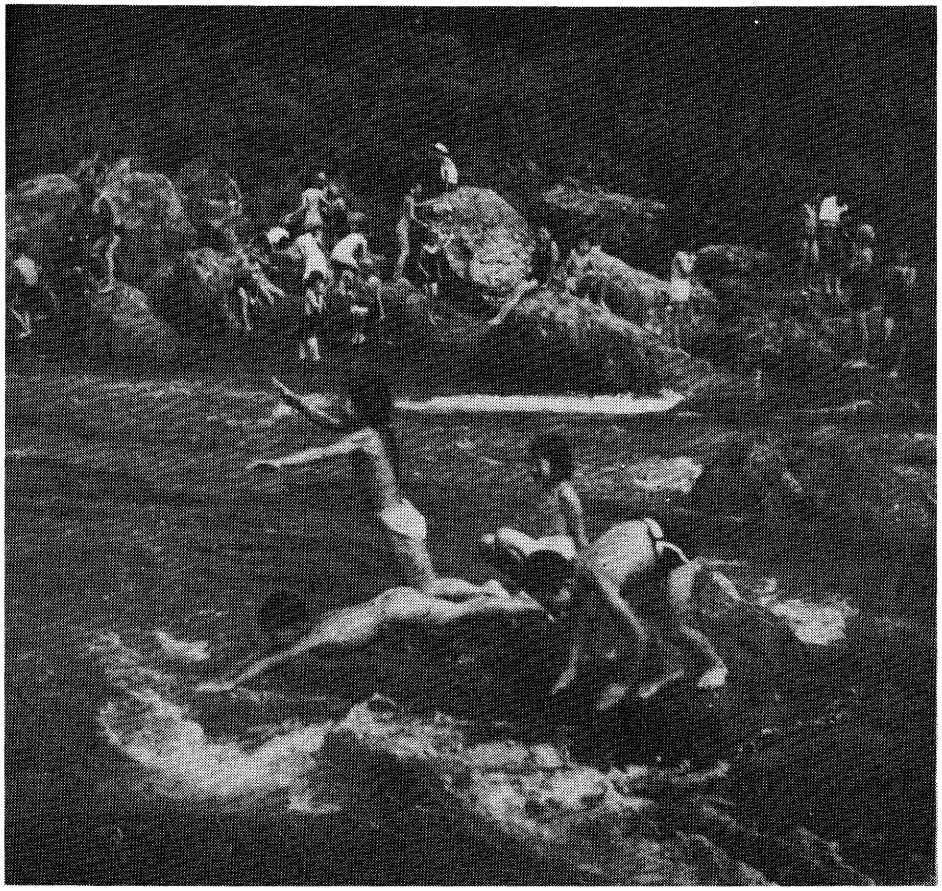
▼ **ソ リ**





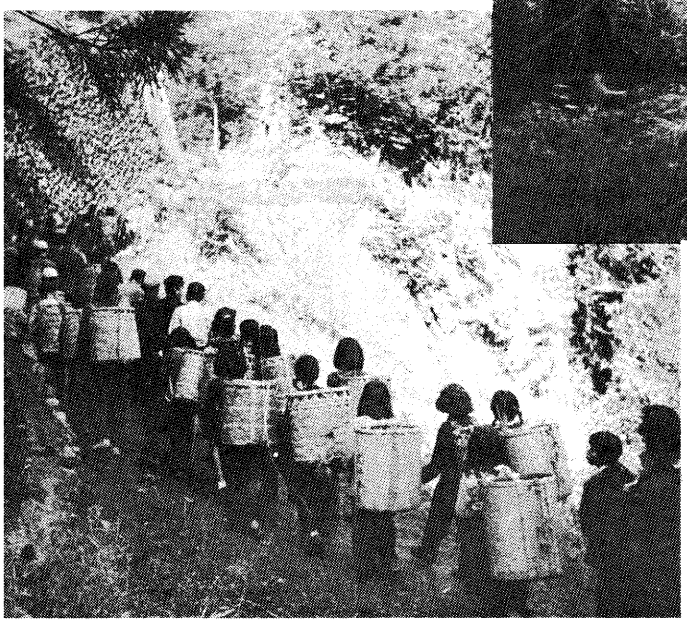
▲
水浴び ▶
(宮淵) ▼
秋川
少年野球団！

ラ▶



お手伝い

▶下刈り鎌をもち
▼背負かごをしょって
山へ登る生徒たち。学校林の
手入れとわらびとり。
終戦後しばらく植林ブームと
食糧難がつづいた。



おわりに

近年、各種の社会教育施設、体育関係施設の設営が進んでいる。しかしそれらの管理された施設は規則が繁雑で、必ずしも幼少年向きではない。また民営の施設は費用が馬鹿にならない。親子同伴で、たまにしか利用できないぜいたくな遊び場になっている。※

▼お手伝いの合間に—（戦時中）

※「素直であるが万事受身で、消極的な子どもが多くなった」という声をよく耳にするが、社会の進歩が生んださけられない帰結なのであろうか。

「子供の生活から活気と生彩がなくなったのは、子供が自然から切り離されたため」とは多くの識者の指摘するところであるが、さればといって、子供と自然の関係を回復させようとしても、今では肝心の自然そのものが面変りしている。秋川も土地っ子にとって昔日の魅力はない。

坂本氏の写真は、失われたものの貴重さと、その回復の重要性を、今さらのように教えてくれる。